

子どもの心とからだの健やかな成長をめざして —子どもたちが安心できる関わり方—

2023/08/19

第42回愛教組連合養護教員研究集会

8月19日、各単組・支部の女性部長、養護教員約200人の参加を得て、第42回愛教組連合養護教員研究集会を開催しました。「子どもの心とからだの健やかな成長をめざして—子どもたちが安心できる関わり方—」をテーマに基調提案・意見交換・講演を行い、学習を深めました。

講演会

演題：「子どもたちの心は今…～新たな時代に向けて私たちができること～」

講師：藤江里衣子さん（藤田医科大学医学部医療コミュニケーション講師）



心身ともに不調を抱える子どもたちは、自分自身の葛藤を自ら乗り越えていこうと試行錯誤している。そんな子どもたちに寄り添い、子どもの心に何が起きているのかを理解し、見守ったり、支援したりしてくれる大人が必要である。子どもたちに、自分でもどうにもならない感情を、受け止め見守ってくれる人がいるという経験をさせることが大切である。起立性調節障害や自傷行為も、子どもの行動を責めるのではなく、原因を冷静に分析しながら、短期的かつ長期的な視点で対応することで、状況を改善していくことができる。

それらのことを、実際に子どもたちとどう向き合っていくべきかをふまえて教えていただきました。最後には、「先生自身が心身ともに健康であることも大切。一人で抱え込むことなく、周りに相談しながら子どもたちの成長を見守ってください」と温かいメッセージもいただき、たいへん有意義な会となりました。

基調提案

子どもたち一人ひとりにきめ細かな対応をしたり、健康教育を充実させたりしていくために、養護教員の複数配置の拡大や妊娠負担軽減措置等の拡充は、県全体の重要な共通課題である。

養護教員が一堂に会するこの会で、互いに情報を共有し合うことが、交渉の一助となり、制度改正につながるようねばり強く取り組んでいきたい。

意見（養護教員の職務の現状と課題）

- ・複数配置校の養護教員から「負担軽減措置が使えず、もう一人の養護教員に負担をかけてしまった」「健診の時期と体調が悪いときが重なると、休みづらい」といった声を聞いている。養護教員が2人必要だから複数配置校になっているのであり、妊娠した養護教員が十分に職務にあたれない場合は、専門的知識をもち、子どもに対応できる養護教員により補うべきだ。複数配置校だから適用されないのではなく、養護教員個人の権利として利用することができるようになれば、妊娠している養護教員ももう一人も、互いに負担が軽減され、子どもたちへの支援の充実につながると思う。複数配置校の養護教員にも、負担軽減措置が適用されることを強く望む。
- ・複数配置校の養護教員からは、「来室者が多くても、一人一人の子どもに十分な対応ができる」「緊急時に、相談したり分担したりして、的確な対応ができる」「心の問題が多様化するなか、一人ひとりの子どもにきめ細かな対応ができる」などの声があがっている。複数配置の基準にやや満たない単数配置校では、学級などで保健指導を行いたいと考えても、保健室を不在にできず、実施が難しい。それは、小規模校でも同じである。一方で、複数配置校では、一人の養護教員が保健室に在室できるため、安心して学級で保健指導を行うことができ、多様化する心身の健康課題に、きめ細かく対応できる。複数配置基準の引き下げは、子どもたちが安心して保健室を利用したり、保健教育を通して自分の健康と向き合ったりするために必要な制度である。配置基準の引き下げを強く望む。

参加者の声

- ・自傷行為について、養護教員としてどういう対応が必要か、たいへん勉強になった。また、構ってほしいだけと思っていた子にも、自傷行為を始めた理由があるのだから、それを理解して対応しないといけないとわかった。
- ・自傷行為のメカニズムを知り、繰り返す意味や悪循環なことがわかりやすかった。養護教員自身も自分を大切にすることが、子どもたちの支援へつながっていくことを改めて実感し、リフレッシュもしながら子どもたちと向き合っていける2学期にしていきたい。
- ・自傷のメカニズムについては、特に興味深かった。本校には、さまざまな家庭環境を抱えている生徒が在籍しており、虐待経験と自傷の関係を確認でき、とても勉強になった。虐待経験のある子どもが抱えるものはとても複雑で、一人ひとり違うものだが、生徒にとって「安心できる」「あの先生なら相談してもいいかな」と思ってもらえるようなかわりができたらと思う。
- ・養護教員に対して、自分を大切にすることも仕事の一つという言葉が印象に残った。自分の気持ちを意識しながら、無理をし過ぎないように職務にあたっていきたい。